魔王と魔王式砲撃物語

kazuto.t0t0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と魔王式砲撃物語

【Ｎコード】

Ｎ６９９４Ｘ

【作者名】

ｋａｚｕｔｏ．ｔ０ｔ０

【あらすじ】

高町なのはの物語に主人公高瀬ゆうきの物語が交差する…。魔法少女リリカルなのはの原作にオリ主を加えた原作改変小説となっております。保守的ラブコメ主義的革命的なのは至上主義、といったようになのはラブラブ！でお送りする予定満載ですので、よろしくお願いします！

それは不思議な出会いだな（前書き）

初投稿、よろしくおねがいします！

それは不思議な出会いだな

周囲を緑茂る山々に囲まれ、視界のかなたまで展望する海に縁取られた街—海鳴市。一都市として、景観の優れた観光地として、そして穏やかなる人々の暮らしの場所として一等級なこの街で、新たなる出会いの物語が始まろうとしていた。

幕開けは唐突に、しかし、やがて世界を背負う少女達はお互いの想いをぶつけ合い大切な、大切な出会いを果たす。

魔法少女リリカルなのは「魔王と魔王式砲撃物語」　Ｕｎｌａｂｅｌｅｄ　始まります。

窓ガラスを通し俺の部屋を満たす柔らかな朝の陽の光で目が覚めた。

自然な目覚めはけして不快な気持ちを俺にもたらすようなことはしない。朝一番からの幸運に思わず頬が緩むのもしょうがないことのはずだ。

身体を起こす間にちらっと壁時計をみるが、今日の俺は相当に運がいいらしい、学校への登校までの時間も十分にある。

何をしようか？ふっと湧いたこの優雅（フリータイム）な時間。当然だ、こんな時に俺がとる行動は決まっている。

いつものようにぱっとパジャマから着替えてしまうと、昨日のうちに用意しておいた登校用のかばんを持って静かに階段を降りる。降りるときは、あくまで静かにだ。あまり大胆に動くようなことがあれば、俺の全ての思惑は崩れ去ってしまう。

ゆっくりと階段を降り終えた俺は、玄関にかばんを置いて、台所へむかった。

思惑とはそう、いつも多忙な俺の兄へのせめてもの恩返しのため

に朝食を作るのだ。
俺達兄弟がたった二人の家族になってしまったのは、いつのことだったろうか。
三歳。その時には少なからず両親はいなくなってしまっていたように思う。丁度大学受験を控えていた兄さんがいなければ、俺がどうなっていたかなど想像もできない。
そして今年。公立海鳴小学校三年生となるまで、苦労して入学したであろう医大の勉強片手に俺を育ててくれた兄さんの苦労は計り知れない。
今年の国家試験に向け、さらに努力をし、奨学金だけでは生活できないため、バイトを続ける兄さんの負担を減らすことは俺の第一目標だ。
負担を減らすといっても大したことができるわけではない。今日のように家事を手伝ったり、普段の行動を良識の範囲内におさめたり、まぁ兄さんにとって「いい子」であれるように気を付けているだけだ。
そうこう考えるうちに朝食はしっかりできあがっていた。と、言ってもごはんは昨日のうちに炊飯予約をすませていて、炒めものや味噌汁をつくるだけしかしてないが。
時間も兄さんを起こすには丁度いいだろう。俺は階段をのぼると、昨日もバイトで遅くなってぐっすり眠っているだろう兄さんの部屋に入って、兄さんを起こした。
「おはよう。兄さん」

「じゃあまた明日！」
学友と校舎の玄関で別れる。
春の陽気な午後、たくさんの小学生が散り散りに我が家へと帰っていくのを俺はのんびりとした気分で見送りながらゆっくりと帰路

を歩く。
今日は月一の本の販売日で、いつもは一緒に帰る友達も別方向。俺にとっては久々の一人下校だ。
人といるのが嫌いなわけではないし、むしろ俺は人とのつながりを心の底で願っているほうだとおもっているが、たまにはこうして一人で散漫な思考をめぐらせながら下校するのもいいものだと思う。
俺にとって両親がいないという事実は、実は大した問題（コンプレックス）になりえない。
兄さんがいたし、そんな頼りになる兄のもとで育ったおかげなのか、自分でいうのも何だが友人は多い方だろう。実際、外で友達といることが多く、家で過ごす時間は、家事と睡眠のためにしかない。
友人と、兄に恵まれたおかげで寂しさがない。俺は、両親がいないというハンディキャップを差し引いても、運がいいほうだとおもっている。まぁ、その分兄さんには多大な苦労を強いてしまってはいるが。
それにしても、あのミステリーはどんな展開を見せてくれるのか。そんなことを考えていると、ふと頭の後ろのほうにぴりっとした痛みを感じた。
「いたっ」
俺は思わず声をあげてしまったが、実際に感じた痛みは、冷静になってみれば大したことはなく、逆にささいなことで声を突然あげてしまったことに羞恥を感じ、周りをうかがった。
しかし、俺の周りには人っこ一人もおらず。原因不明の痛みに首をかしげた。
「一体、なんなんだ？」
しばらくきょろきょろとしていると、今度はさっきよりはっきりとした痛みが俺におそいかかってきた。
「いたた。ほんとになんだ？」
すると、わずかな、本当にかすかな予感ともいうようなものがした。公園の裏、その狭く暗い道の先にこの痛みのもとがあると。

正直、俺は勘や予感といったものに対しては、あくまで経験則から導かれる明確な根拠のない答えでしかない、というような夢のない考えしか持っていない。
「だけど…今回ばかりは勘が正しい気がする」
こういう考えも、自身の理由なき行動を強引に正当化するための屁理屈にすぎないと考える人も多いだろうし、実際自分自身でもそう思いつつも、俺の足は薄暗い小道へと向かっていた。
道を進めば進むほど予感は強まってくる。俺は、予感と理性のはざまを揺れ動きながらも足をとめず、むしろしだいに早めるように歩いていた。だんだんと歩きは早まり、小走りになり、しまいにはすっかり走っていた。
走っていると、何かが小道に落ちていることを見つけた。
予感の高まりが消え、俺はいつのまにか走る足をゆるめ、ゆっくりとそれに近づいていった。
「これは…いたち、いや、おこじょか？」
落ちていた、いや、道に倒れていたのはおこじょのような小動物だった。しかも、こういった種類の動物には珍しく、赤い石のついた首輪までつけている。
「しかし何で倒れて…？もしかしてこれ、けがをしてるのか？」
よく見てみると、足や胴体にわずかなけがをしていることがわかった。他人のペットが逃げ出して、勝手にけがをして倒れていた。見つけたはいいが、これはわざわざ動物病院まで運ばないといけないのだろうか。
そんな風に考えていると、俺が来た道とは逆の方向から女の子が走ってくるのが見えた。
真っ白なワンピース、そして黒いラインの入ったセーラーカラー。あれは、私立聖洋大付属小学校の制服だ。お嬢様学校らしい、清楚で、しかしどこか憧憬の念を抱いてしまうその制服は、大変言いにくいことではあるが、着る人を選ぶ。
しかし、その子は見事なまでにその制服を着こなしていた。落ち

着いた、やや茶色がかった髪はさらさらで、若葉色のリボンで結んだツインテールも、幼さとかわいらしさを強調している。小さな卵型の顔に、長いまつげのぱっちりとした目。桜色のぷっくりとした唇は、走ってきたためか少し開かれたままで、白い歯がちらっと見え隠れしており、上気した頬は女の子らしいかわいらしさを感じさせた。

はっきりいって、うちの学校に来ようものなら、早々にアイドルへと祭りあげられ、幼稚な男子たちからは愛情を裏返した、気をひくための嫌がらせなんて受けてしまうであろうことを簡単に予想させる容姿である。

俺も若干ながら見とれていたことは否定できない。だが、それ以上の驚愕が俺の思考をかなたへ向かわせていた。

「もしかして、なの…高町か？」

そう。走ってきた少女は三年ぶりに会う幼馴染…高町なのはだったのだ。あのとき公園で出会った少女。そして、小学校が違うために会わなくなっていた少女。

「もしかして…ゆうきくん？ゆうきくんなの？」

俺の顔も予想だにしない再開のため、間抜けなことになっているだろうが、彼女のほうも茫然とした様子だ。愕然、亡羊といった表情が、俺の自惚れでなければ喜びを隠せないといったように変わっていく。

「ゆうきくん！久しぶり！！ほんとに久しぶりなの！！！」

花が咲くような笑顔。俺はどぎまぎした感情をおさえきれないまま、なのはのことを見つめた。心底俺を信頼してくれているような、その笑顔に、懐旧の念にかられた。昔は、俺の、そしてなのはの家庭の事情のため、いつ一緒にいないのか分からないくらいの時間を共に過ごしていた。そして今度は俺の家計の事情で同じ学校には行けなくなり、離れてしまったとはいえ、俺にとっては、兄に次ぐほど長いときを共に過ごした幼馴染なのだ。

「ほんとに、久しぶりだな…高町」

俺の言葉にその端正な眉を顰め、いぶかしげな表情をするなのは。きっと、昔のように「なのは」と呼ばないことを怪訝に感じているのだろう。しかし、俺の級友たちの学校での様子を顧みると、正直かわいらしい女の子であるなのはのことを、名前で、しかも呼び捨てで呼ぶことはなかなか難しいことであるように俺は思った。俺はなのはに対する後ろめたさと、突然の再開に対する戸惑いを感じながら。そしてなのはは俺に対する疑問を隠さないまま、お互いを見つめあった。そして、なのはの疑問が形となったようで、なのはゆっくりを口を開き始めた。

「ゆうきくん。どうして私のことをなのはって」

「あー！やっと追いついた！！なのはったら突然走り出してどうしたのよ！？」

なのはが俺に疑問をぶつけようとした、その瞬間に、なのはの来た方向から二人の女の子が現れた。正直、答えにくい質問で、なのはを傷づけてしまう可能性があったので、あとから現れた彼女たちには微小ながら感謝の念がたえない。

現れたのはまたどえらい美少女達だった。なのはに怒涛の勢いで話しかける少女は、男勝りな気の強さを感じさせるが、それはまったく欠点となりえないだろう。聖洋大付属の真っ白なカラーに負けないほど透き通る白い柔肌は一見病弱な印象をもたらしそうなものだが、勝気なまなざしと健康的な血色のよいまるっとしたほっぺが彼女がそんな器でないことを証明している。陽を遮ったこの暗い道でさえ輝く金色の髪も、きっと衆目をとらえて離さないだろう。

彼女に隠れるようにして俺を見ている少女もまた、負けていない。本当に好対照な二人だと思う。艶やかな黒髪、物静かな雰囲気。ともすれば日本人形のような凄みを感じさせようものだが、おだやかに湛える微笑の絶妙さときたらそれはもう、見る者に聖母のごとき慈愛を幻視させる。なのはを含め、この三人。本当に大した美少女っぷりだ。こういうのを類は友を呼ぶというべきなのか、それともまさか聖洋大付属はこれがスタンダードなのだろうか。だとしたら

相当に有り得ない所だ。
　失礼にはならないよう注意していたつもりだが、じっと見つめる形になっていた俺を金髪の子が不審げに睨んでいることに気が付いた俺は、気まずい汗が背中を流れるのを感じながらゆっくりと視線をそらした。
「ねぇ、なのは。一体こいつ誰なの？」
「あ、ゆうきくん、だよ。私の…昔からの、大切な友達」
　俺が昔とは違う態度をとったせいで、少しなのはを悩ませてしまっただろうことに今更ながら申し訳なさを感じる。しかし、少女達の異性に対するスタンスが明確でない以上、やや距離をとったほうがいいだろうとも思う。なのは、と気軽に呼び、昔のようにありたいという感情を抑え、慎重に答える。
「初めまして。俺は高瀬　結城。高町とは、昔からの友達。よろしくな」
「ふ～ん…私はアリサ。アリサ・バニングスよ。なのはの親友よ。まぁよろしくしてやらないこともないわ」
　ずいぶんなご挨拶である。しかし、原因が俺のなのはに対する態度にあるとしっかり理解していれば、なのはのために警戒を解いていないのだということが見て取れる。そう思えば、かわいらしいものだし、なのははいい友達を持つことができたんだと安心できる。だが、ともすれば苛烈な印象を与えかねないアリサの威嚇に、俺は苦笑がもれるのを我慢できなかった。
「はじめまして、私の名前は月村すずかです。私もなのはちゃんの親友で…えっと、なのはちゃんもそう呼んでるし、ゆうきくん、で大丈夫かな？」
　アリサの挨拶に笑みを深めながら自己紹介をしてくれたすずか。大人びた子なんだなと、自分が世間一般的な基準に照らせばそう評価されるであろうが、俺はそれを棚に上げて、思わず感心してしまった。
「ああ、かまわないよ。月村さんに、バニングスさんも、好きに呼

んでもらってかまわない」
「ふん！そのよそよそしい態度は気に入らないけど、なのはに免じてユーキ、って呼ぶことにするわ。…それよりなのは、さっきは急に走り出してどうしたの？」
「あ、そうだったの。何か急に声が聞こえた気がして…ゆうきくん？その手にもってるのって…？」
　そうだった！
　思わず声をあげそうになるところだったが、俺はけがをしたおこじょを見つけて、動物病院に連れていこうか迷っていたところだったんだ。俺からおこじょに視線を移しはじめたなのは達によく見えるようにおこじょを差出しながら、ゆっくりと説明を始めた。
「俺もなんかある気がして、この道にきたらこの…おこじょ？が倒れてたんだ。どうもけがをしてるみたいで、動物病院に連れて行こうか迷ってたんだ」
「あんたっ、ばっっかじゃないの！？そんなの迷うまでもないじゃない！すぐに近くの動物病院に連れてくわよ！！…それにユーキ、あんたペットにおこじょはないでしょ、大体、色が違うし！」
　…怒られた上に、呆れられてしまった。どうやらアリサは面倒を顧みないほどに優しいか、並々ならぬ動物好きらしい。まぁ俺に対する発言からして、俺のアリサへの評価はせいぜいが後者である、といった辛いものにならざるをえないが。しかし、そんなにおこじょという発想は変わっているだろうか。フェレットよりもぱっとでてきそうな気はするが。
「私もつれて行った方がいいと思うの。ゆうきくん、一緒に行かない？」
　すいっと一歩俺に近づきながら聞いてくるなのはも同意見のようだ。四人ならば、いざ飼い主を見つけよう、ということになっても、対応はそれなりにできるだろうと俺も同行することに決めた。多少の面倒はしかたあるまい。
「分かった。俺も一緒に行くよ。…高町」

最後の最後まで名前で呼ぼうとしない俺に、憮然とした表情を浮かべながらも、けがをした…フェレット、ということにしておこうか、を連れていくために病院へとなのはは歩きだす。
「たしかこっち。ついてきて。…ゆうきくん」

「院長先生！ありがとうございました！！」
「「「ありがとうございます！」」」
「いいえ、いいのよお礼なんて。あなたたちは素晴らしいことをしたんだから」
笑顔でそういってくれる院長先生は、俺達がフェレットを連れてくると、手早く処置をしてくれた。流石はプロ、といったところだろう。
なのはたちはフェレットの様子が気になるのか、釘づけだ。
「それにしても、院長先生。これ、フェレットですよね？」
「う～ん…フェレット、なのかな？変わった種類だけど…」
アリサがふと気になったのか院長先生に尋ねるが、院長はこいつがフェレットであるかは明言しなかった。やはり、俺のおこじょという発想も、あながち間違いではないのではないか。
「で、でも、おこじょなんてことはないですよねっ！」
「まぁ、きっとおこじょではないでしょうね。それにしてもこの首輪…宝石かしら？」
院長がはっきりとは肯定してくれなかったことに焦りを感じたのか、アリサがあわてて確認をとった。これで俺のおこじょという考えは完全に否定されたわけだが、こうもアリサに、どうだといわんばかりの顔を見せつけられると、流石に落ち込むというものだ。
「アリサちゃん。あんまりゆうきくんにそういう態度とるの、よくないよ？…あ、起きた」
すずかがフォローを入れる。このフォローがあるからこそ、アリ

サのともすれば尊大かつ自己中心的…つまり唯我独尊といった態度が周囲に許容されているのだろう。まったく、なのははいい友達を持ったものだ。…しかし、流石にアリサの態度は戴けない。俺は心の中でこっそり、アリサがもう少し大人になったとき、今日日の態度に羞恥で悶えてほしいものだ、という暗い考えを抱かざるをえなかった。

「なのは、見られてる」

「う、うん」

起きたおこじょ…違った、フェレットはきょろきょろとした後、ちらっと俺を見ると、そのあとはなのはにご執心のようだった。まったく、ヨーロッパケナガイタチの飼養品種のくせに大層な女の趣味といわざるをえない…。まぁこんな小動物に人間の性別など実際は関係ないだろうが。

じっと見つめてくるフェレットに、そっと手を伸ばしたなのは。その指がフェレットにぺろっとなめられる。

「うわぁ…！かわいい…！！」

ぱっと満開の笑顔を見せるなのははやっぱり、とびっきり可愛い女の子だった。思わず俺もフェレットがどうとか、おこじょがどうとか、あるいは思春期が始まり、異性間の距離が広がってしまうなんて当たり前のことさえどうでもよくなって、ただなのはのことを素直に「なのは」と呼びたい、なんて気持ちになってしまう。

いや待て、違う。今大事なことは、これからフェレットをどうするかだ。俺たちのうちの誰かがあずかるのか。だとしたらそれは誰か。それに、治療費だって払わないといけないだろう。幸い、今日は本を買うためにそこそこの現金は所持している。が、確実に全額出せるかと聞かれたら、やや心もとない額でしかない。

そんな俺の考えを見抜いたのか、院長先生が優しい笑みを浮かべた。

「いいのよ。さっきも言ったけど、君たちはとってもいいことをしたの。だから治療費はいらないわ。安心して？後、今日はこの子は

預かるから、また詳しいことが相談できたら会いにきてあげてね？」
　まったく、出来た人だ。
　俺としてはこの申し出は願ってもないことだ。三人の考えがどんなものであるか、ちらっと視線をよこすと、どうやらアリサとすずかは同じ意見のようだ。
　アリサとすずかといったが、なのははどうなのか。という問いに対しては、なのははフェレットに夢中で、俺達の目配せにも気が付かなかった、というのが返答になるだろう。普段はしっかりしているが、どこが自分だけの感覚で行動するといった癖はなおってないようだ。
「それじゃあ、院長先生が言われた通りにします。できるだけ早く今後について決めますので、それまでよろしくお願いします」
「「「よろしくお願いします！」」」
「もちろん、任されたわ！ゆっくりでいいから、無理はしないでね？分かった？」
「「「「はい！ありがとうございます！！」」」」

「んで、一体どーするのユーキ。私たちはこれから塾だから、すぐに話し合いってわけにはいかないわよ？」
　病院をでるとすぐにアリサが聞いてきた。
　その点については俺も悩んでいた。学校が違うため、俺達が連絡をとりあうのも楽ではないし、だからといってなのは達にまかせっきりにするのも、男としてどうかと思う。
「じゃあゆうきくん！けいたいの番号教えてなの！」
「…高町、残念だが俺は携帯を持ってないんだ。今時の小学生でも、携帯なんて持つのは女子くらいだからな」
　そうなのだ。俺は携帯電話を持っていない。最近は男子もそこそこの人数が持つようになったとはいえ、まだまだ多数とは言い難い。

俺が女の子だったとしたらともかく、男子たる俺が携帯を持っていないのは今まで大した問題ではなかったのだ。
「えぇ…じゃあどうしよう…？」
「…それじゃあ家の電話番号教えとくから、家のだからいつでもすぐ出れるってわけじゃないけど」
代替案として、自宅の番号を教えることにした。俺はかばんからノートをだし、一ページをびりっと破くと自宅の番号を書いてなのはに渡した。
「てかあんたたち、電話番号も知らないで、ほんとに昔からの友達なの？」
「まぁ、小学生になるまでの話だしな。そんなときに電話なんて、そうそう使うことはないし、あまり電話が必要ということもなかったからな」
アリサの疑問も当然だが、俺となのはの交友時期が小学生になるまで、と思えばお互いの電話番号をしらないのもうなずけるだろう。それにあの頃は、電話なんてしなくても、ほとんどの時間をなのはと過ごしていた気もする。
「にゃはは…。そのおかげで小学校が分かれてから連絡がとれなかったんだよね。でもこれからは家の電話だけど、好きな時にゆうきくんとお話しできるね」
何をいってるんだ…。
正直、なのはの距離感の近さには戸惑いをおぼえるばかりだ。
「…とりあえず、三人で話し合ってその様子を後で教えてくれ。俺もいくつか考えておくから、三人の話し合いの結果しだいで臨機応変にいこう」
「分かったわ。じゃあねユーキ」
「うん。またねゆうきくん」
二人は俺に別れを告げると、塾へ向かうために歩きはじめた。
「…ゆうきくん。久しぶりに会えて、ほんとに嬉しかったの…だから、今度は絶対お話聞かせてね…」

なのははそう言うと、アリサ達をゆっくりと追い始めた。
最後まで、俺の態度についてなのはは考えていたらしい。学校が違えば、男女の適切な距離の取り方も違うのだろうか。
「…結局、俺の気遣いは裏目だったのかもな」

すっかり冷えて暗くなった外を見ながら、俺は自室でくつろいでいた。春といっても、未だに夜は冷える。月の光は叢雲に遮られ、街頭の人工的な光だけが夜闇に浮かんでいる。こんな日の高所からの展望も、きっと悪くはないだろう。
まだなのはからの連絡はない。俺の予想では、家が飲食店を経営しているなのはが引き取るのは論外、アリサ、すずか、そして俺のうち誰かが一時的にあのフェレットを預かることになるだろう。幸い、うちは他にペットがいないから、一時預かりならなんとかなる。
俺はなのは達の話し合いがどうなったのか、のんびりと連絡を待つつもりだった。しかし、結局この日、俺がなのはから話し合いの連絡を受けることはなかった。

それは再び、突然のことだった。
「いたぁ！…またか」
昼の時のような痛みが、再び俺を襲った。いや、違う。今度ははっきりと意味がわかる。（俺を呼んでいる）
場面は移れど、あの時の再現（リピート）のように、俺はフェレットを預けている病院へと走り出していた。
走る。景色は俺の後ろへと、後ろへと、どんどん流れていく。予感に導かれるままにまっすぐ、無我夢中で俺は走った。病院までの距離が遠い。俺の頭を占領してやまない予感が、俺をさらに急かしている。
はぁはっはっはっは。

どくどくどくどく。
俺の聴覚領域の全てが、自分の呼吸と心拍に占められている。うるさい、まだだ、もっともっと、予感の催促がさらに強まる。俺は自分の限界を超えたペースで走り続けた。

「はぁはぁはっ…。着いた…！！」
ほどなくして俺は槙原動物病院についた。しかし、予感の強さとは裏腹に、辺りは静寂としていた。
「…結局、予感はあくまで、予感にすぎないのか…。っ！いや、あれは！？」
所在なく周囲を見回すだけだった俺の視界に、常識的に有り得ないものが見えた。
それは黒い、靄の塊のようなものだった。塀の上に立ち、俺としては立っているという表現が正しいのかは謎だが、おぞましいほど紅い眼で、病院の一室を見つめているようだ。その靄が実体を持っているかは定かではないが、結構なサイズ（でかさ）だ。昔、イノシシにぶつかられて大破した車があったなんてことが俺の頭をよぎる。思わず、俺は一歩後ろへと下がっていた。その瞬間に俺はかつてないほどの後悔をしていた。
それがこちらを向いた。
まずい。
そう思ったと同時、俺と靄は飛んでいた。
靄は俺の方に、俺はそれをかわすように、思い切って左へ飛んでいた。恐ろしいほどの体当たりだ。俺がかわした結果、靄は地面にむかってのダイブをすることになったが、硬いアスファルトが抉れている様を見ると、やはり俺が受け止められるものではなかったようだ…、冷や汗が止まらない。
「くそっ！予感がして、来たらこんなことになるなんて、裏目すぎる…！！」（悪い目にあう）
こうなったらさっさと逃げるしかない。俺は靄に背を向けて、全

力で走り始めた。
今日は走ってばかり。体力的な不安は大きい。果たして、俺は無事に逃げきれるだろうか…。俺の気持ちは半ば諦観の念で占められていた。

「すみません！力を貸して下さい！！」

突然俺にそんな声が聞こえた。逃げる俺の横に、いつの間にかフェレットが併走している。まさか、こいつが話しかけて来たのだろうか。

「あなたには資質があります！だから…どうか僕に力を貸して下さい！！」
本当にフェレットがしゃべっている。しかも全力で走る俺に併走して…。正直、非現実さと、傍から見たときのシュールさを想像して足を止めそうだ。
「つっても、一体何に力を貸すんだ？」
「っ！？ゆうきくん！？って、なになに、なんなのあれっ！？」
しかも、角を曲がるとなのはまでいる始末。あまりのカオスっぷりに頭がまわってきた。
「とりあえず、逃げるぞなのは！！」
「！？…うんっ！！」
俺はなのはの手を取ると再び全力で逃げ始めた。俺となのはの会話がひと段落するのを待っていたのか、再びフェレットがしゃべり始めた。
「後ろにいるあれを…ジュエルシードを封印したいんです！どうか、どうか助けてください！」
「封印ってのは、正直俺も助かるが、そんなの一体どうやるんだよ？」
「僕は…この世界じゃない、そう、違う世界からやってきたんです。

僕のせいで、ジュエルシードを暴走させてしまった…。僕の力では足りない、でも、あなた達には資質があります！お礼はします。必ずします。だから、僕の持っている力をあなた達に使って欲しいんです、僕の力を、魔法の力を！！」

「まほう？」

流石になのはも呆けたような声で聞き返す。俺も同じ気持ちだ、しかし、あんな靄が現れて、フェレットがしゃべるんだ、魔法だってあるのかもしれない。

「魔法なんて、見たこともないけど…あれが封印できるなら」

答えようとすると、不意に寒気が。とっさになのはを引っ張り、横へと倒れる。

「ぐおおおぉぉぉおおお…」

さっきまで俺達が立っていたところに靄が落ちてきた。あやうく、三人でぺちゃんこになるところだった。

「お礼は必ずしますから！」

「お礼とか、そんな場合じゃないでしょ！？」

「なのはの言うとおり。まずは俺達がどうすればいいか教えてくれ！」

本当にお礼とか言ってる場合じゃない。なのはも来た以上、必ずなのはに怪我をさせることもなく、生きて帰らなければならないのだ。

「これを手にもってください！」

フェレットはそういうと赤い宝石を差し出した。

「暖かい…」

「…？そうか？俺は何も感じないが…」

なのははその宝石に暖かさを感じたらしい。俺には、ただ石の無機質な感触だけしか分からなかったが。

「じゃあ女の子のほう、それを握って、目を閉じて、心を澄ませて、

僕の言うことを繰り返して下さい」
　どうも俺はダメだったらしい。お眼鏡にかかったなのはは、フェレットの言うとおり、宝石を握って目を閉じた。
「いい？行くよ！？」
「うんっ！！」
　正直、この場面での仲間外れはつらい…。すぐ近くで化け物が呻いているのに、何もしていない俺。
「我、使命を受けしものなり」
「われ…しめいをうけしものなり…」
「契約の下、力を解き放て」
「えと…けいやくの下、力をときはなて」
「風は空に、星は天に」
「風は空に、星は天に」
「そして、不屈の心は…」
「そして、不屈の心は…」
「「この胸に！！」」
「「この手に魔法を　―Ｒａｉｓｉｎｇ　Ｈｅａｒｔ《不屈の心》
　Ｓｅｔ　ｕｐ！！」」
「Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ…ｓｅｔ　ｕｐ」
　なんと宝石までしゃべった…。と思うと、俺たちは桃色の光に包まれていた。
　あの靄とは違う、何とも言えない安心感のある光に包まれながら、未だ混乱中のなのはと呆然としているフェレットを見つめた。
「え、えぇ？」
「なんて魔力だ…！！落ち着いてイメージして、君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！！そして、君の身を守る、強い衣服の姿を！！」
「そ、そんな、急に言われても…」

えっとえっと、と困るなのはを見ていると、そんな場合でもないのに和ましい気分になってくる。
「と、とりあえず、これで！」
どうやらイメージができたなのはがそう言うと、なのはが淡い桃色の輝きに包まれた。そして。

突然なのはの衣服が消えていた。

あほかっ！
土曜の朝のアニメみたいな展開だとは薄々感じていたが、変身シーンまであるとは予想外だった。しかも、変身中の姿が若干だが外に見えている。こんなんでいいのか、と思わず叫びたい。
「成功だ…！！」
のんきにフェレットがこんなことを言ってるのを聞いて、思わず殴りたくなった。どうしてもさっきの「成功だ…！！」が「最高だ…！！」といっているようにしか聞こえない。
そうこう俺が悶絶していると、どうやらなのはの変身が終わったようで、なのははさっきまでと衣装を変えて、地面に降り立った。
白がベースのワンピースは、なのはが通う小学校の制服とうり二つだが、制服と色違いのブルーのラインがなのはの無垢な可愛らしさを際立たせている。アクセントのラインの入り方も、素晴らしい。胸元で主張する、大きな赤いリボンもなのはの魅力を高めている。先ほどの変身シーンのこともあり、俺は自分の赤面を隠せずにいた。
「ふぇふぇぇ！？嘘、なんなのこれ？」
別の理由ではあるが、なのはも大いに動揺しており、赤面に気づかれなかったのは僥倖だった。裸を見て照れるのを本人に気づかれるとか、展開がきつすぎる…。
「ぐおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
なのはの変身が終わるとほぼ同時に、地面にめり込んでいた化け物も準備完了（スタンバイ）していたらしい。あいかわらず、禍々しい姿をしてい

る。
「ふぇぇぇ…ゆうきくん、どうしよう！？」
…どうしようといわれてもな。
「なのは、どうもこれは、お前が魔法で何とかする流れみたいだぞ？」
「えええ！？そんなのできっこないよ！？」

それは不思議な出会いだな（後書き）

お目汚しでしたが、これからも読んでいただけたら幸いですm（＿）m

魔法の呪文がリリカルとか（前書き）

今回は短めです。なんとか文字数を増やそうとねばりましたが力量不足でした…

魔法の呪文がリリカルとか

「えええ！？そんなのできっこないよ！？」
そういって若干の涙目で俺を見つめるなのは。
か、可愛い！？
なんて言うのを化け物（ジュエルシード）が待ってくれるわけもなく、予告もなしに飛び掛かって来た。
「なのはっ！避けろっ！」
「っえ？」
俺から狙いを変えた化け物がなのはに襲い掛かる。なのははそれに反応できず、振り向いた時には、もう避けられないところまでせまっていた。
動物病院で簡単にアスファルトを抉った体当たり、そして先ほど地面を割った突進、それになのはの身体が耐えうるはずもないだろう。数瞬後のなのはの姿を幻視した俺は、絶望の中叫んでいた。
「なのはーーー！！！」
しかし、化け物が止まるわけもなく、走馬灯のごとくすべてがスローに見える視界のなか、驚きに表情を染めたなのはと化け物の姿が重なる。

「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

その瞬間、流暢な英語の声と同時に、なのはの前に桃色に光る魔法陣が突如として現れ、見事に攻撃を防ぎきっていた。思わず、安堵の息がこぼれる。
「よ、よかった…」
「び、びっくりしたの…」
なのは本人は、あまりに突然の出来事すぎて命の危機だとは思えなかったようだ。リアクション（反応）が薄い。

攻撃を防がれた化け物は、衝撃に耐えられなかったのか、四散している。が、欠片どうしが引っ付きあいはじめ、元に戻るのも遅くはないだろうことを感じさせる。
俺はフェレットを引っ掴むと、なのはの手をとって走り始めた。
「とりあえず、いったん態勢を整えるぞ！」
「うんっ！！」

「…僕らの魔法は発動体、今の場合は彼女の持っているレイジングハート、に組み込まれたプログラムという方式です…。あれは忌まわしい力の下に生まれた思念体…あれを元に戻すには、レイジングハートを使って“封印”をしなければいけないんです」
「なるほど…その“封印”はどうやるんだ？」
俺達は思念体（ジュエルシード）からやや距離を置いたところで、フェレットから“魔法”についての説明を受けていた。
といっても代表として話を聞いているのは俺で、俺と手をつないだままのなのはは、どうやら面倒なことは俺に任せるつもりらしいく、思念体が回復するのを見ては難しい顔をし、俺を見てはにこにこしたりと、場面に似合わないのんきさを発揮している。
「基本魔法は願うだけでできますが、“封印”などの規模の大きな魔法は呪文がないと発動できないんです」
呪文か…。簡単なものならいいが、この場面であまり長い呪文だったりすると、なのはもつらいだろう。
「呪文はどんなものなんだ？」
「呪文は人それぞれです。そもそも、“封印”の魔法自体もデバイスに組み込まれているため、呪文は封印時の大幅な魔力消費に対する自己防衛的機能を保障するものにすぎず…」
スイッチが入ったようでフェレットは滔々と語り始めた。そろそろ思念体（ジュエルシード）も復活しそうでもある、長々と話を聞いている暇はなさそ

うだ。
「なのは、聞いてたか？」
「っえ？なになに？どうすればいいの？」
本気で聞いていなかったらしい。事なきを得たとはいえ、さっき命を失いかけたというのに大した度胸だ。だが、結局魔法が使えない俺はなのはを頼らざるを得ない。しっかりしてもらわないと、非常に困ったことになってしまう。
「自分だけの呪文があるらしいから、それを唱えることで封印ができるそうだ。呪文、考えれるか？」
「呪文…うんっ！大丈夫だよ！」
どうやらぱっと思いつけたようで、なのははにっこりと笑う。
「よし、じゃあ任せたぞ、なのは！」
丁度回復を遂げた思念体が襲い来る。
なのはは杖を構え、さきほども張った魔法陣（protection）を再び前方に展開すると、堂々と呪文を唱え始めた。

「リリカルマジカル！」

ちょっと待て。
あまりにファンシーな呪文に思わず悪寒が走った。だが、なのははまだ9歳の少女なのだ、こんな呪文でもきっと許されるだろう。…きっと、この呪文を俺が唱えることは一生ないだろうが。
密かに悶絶する俺をそっちのけで場面は進んで行く。
「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ…ｓｅｔ　ｕｐ」
レイジングハートの声と共に、レイジングハートはその姿を変え、放たれた桃色の光が思念体を強固に拘束した。
「Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ」
徐々に光はその強さを増していく。
「リリカルマジカル、ジュエルシード“シリアル？？？”封印っ！」

「Ｓｅａｌｉｎｇ」

なのはがそう唱えるとともに、思念体を包む輝きは最高潮まで達した。…そして、光が集束した後に残ったのは、思念体によって破壊された街並みと、きらりと蒼い光を放つ宝石だけだった。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてください」

なのはがレイジングハートを向けると、蒼き宝石（ジュエルシード）は静かに吸い込まれていった。

「Ｒｅｃｅｉｖｅ　Ｎｏ．？？？」

ジュエルシードが完全に吸い込まれると、なのはの防護服（バリアジャケット）も光の粒となり消えて行った。今回は裸になるなんてことはなく、一安心だ。

「終わったのか？」

「ええ、あなた達のおかげで…本当に、ありが…とう…」

言い終えるとフェレットは力尽きてしまった。戦闘も激しかったし、きっとまだ怪我も治ってないだろう。心配したなのはがフェレットを抱き上げた。

「ゆうきくん、この子、大丈夫なのかな…？」

「きっと疲れただけだろ。俺は大丈夫だと思うぞ。…それより早くここから離れないとまずそうだな」

元凶（ジュエルシード）は消えたが、戦闘の痕跡はしっかりと残っている。このままここにいれば面倒なことになるだろう。説明しろと言われてもどうしようもないし、無責任だが逃げさせていただくことにした。

「行くぞなのは」

「っえ…と、とりあえず、ごめんなさ～いっ！」

「っと、ここでいいか」

「はー、はー…ゆうき、くん、速すぎ…」

またなのはと手をつないで引っ張ってきたのだが、どうやらペースが速すぎたようだ。フェレットの様子を見ながら、なのはの息が整うのを待った。
じっとフェレットを見つめていると、どうやら意識を取り戻したようで、すっと俺の手から降りると公園のベンチの上に立った。
「ありがとうございました…おかげでジュエルシードを封印できました」
「まぁ、ほぼなのはのお蔭だな」
本当に俺は何もしていないので、お礼はなのはにするようにフェレットに言った。
「えええ！？そんな、私だけの力じゃないよぉ…そ、そうだ、自己紹介していいかな？」
照れながら話をそらすなのは。その様子にほほえましい気持ちになる。
「えへん」
か、可愛いな。
自己紹介の前に心持ち胸を張りながら、わざわざ咳払いをするなのはにそう感じてしまう。
「私、高町なのは。家族とか、仲のいい友達はなのはって…」
いきなり自己紹介の途中でこちらを見ながら黙るなのは。一体、どうしたのだろうか。
「ゆうきくん！そういえば昼間はわたしのこと、ちゃんと「なのは」って呼んでくれてなかったの！！」
いきなりの剣幕に思わず一歩下がってしまう。
そういえばそうだった。昼間は俺が余計な気を回して、久しぶりに会うなのはのことを名字の方で呼んでいたのだ。どうやら相当気にしていたようで、申し訳ない気持ちになる。
「すまん…久しぶりだったから、つい」
「もう…ちゃんとこれからはなのはって呼んでね？」
約束、と小指を突き出したなのはに付き合って、指切りをした。

「あの…もういいかな？なのは、それとユーキ？」
「あ、ああすまん…俺は高瀬ゆうき。同じく、ゆうきって呼んでくれ」
「ありがとう二人とも…僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」
フェレットはユーノという名前らしい。それにしても部族名か…異世界から来たとフェレット（ユーノ）は言っていたが、異世界にはしゃべるフェレットが、部族を構成するほどいるのだろうか。想像すると、あまりにシュールな光景に悪寒がした。
「ユーノくんか…可愛い名前だね」
にっこりと話しかけるなのは。しかし、ユーノは対照的にうなだれていた。
「すみません…僕は二人を…」
本来部外者である俺達を巻き込んでしまったことに、罪悪感を抱いているのか。しょんぼりとするフェレットというのもなかなか笑える光景だ。
「いや、俺は気にしなくていい。あんなのが暴れてたら大変だしな」
「私も、大丈夫だよ！」
「二人とも…本当にありがとう」
少しは元気が出たようだ。なのはと視線を合わせると、なのはもユーノの落ち込み様を気にしていたようで、感謝の笑みを送ってきた。
「じゃあユーノくんも、一応まだ怪我してるみたいだし、今日はうちにかえろうっか」
「あれ？なのはのうちって翠屋（飲食店）だろ、いいのか？」
なのはの家のことは懸念していただけあって、かなり意外なことのように感じられた。
「うん。ゲージにちゃんと入れるなら大丈夫って。でも、そういえばゆうきくんのおうちでも大丈夫なんだよね？」
「ああ、もちろんだ」

前に考えていたように、なのはのうちがダメだろうから受け入れの準備はしていたのだ。こうなると、どちらの家にするか迷うな。
「あ、ユーキさん。できれば僕も男だし、ユーキさんのうちのほうが助かります」
「ゆうきでいいって。敬語も使わなくていい。…それよりユーノはフェレットなのに、人の性別が気になるのか？」
結構気になっていたことだ。フェレットでも知能があれば他の生物の性別が気になるものなのだろうか。
「ありがとうユーキ、この姿は魔力消費を抑えるためにとっているのであって、僕の本来の姿は、ユーキやなのはと同じ人間なんだ」
「何だって？もう一度頼む」
「この姿は魔力消費を抑えるためにとっているのであって、僕の本来の姿は、ユーキやなのはと同じ人間なんだ」

思わずユーノ（変態）を掴んで上空に投げていた。

「うわぁぁぁああ！！急に何するんだよ、ユーキ！？」
「うるさいっ！この変態！お前、人間のくせに病院でなのはのこと舐めたのか！それにあの変身シーン…」
流石に地面に落とすのは忍びなかったので、落ちてきたところをキャッチしてやった。
俺の追及に対して思うところがあったのか、分かりやすく慌てている。なのはも自覚したのか、顔が真っ赤だ。
「…ユーノくん、流石に男の子になめられるのはちょっと…」
「ち、違うんだなのは！あれは思わず、じゃなくて、そう、フェレットになったときの本能なんだよ！！」
「…苦しいぞユーノ。それに、言い訳になってない」
本当に焦っているようだ。ユーノ（変態）も男だから魔がさしたのだろう。
「あとユーノ、変身でなのはが裸になるのはどういうことだ？」
「ふぇっ！？」

なのはが驚きの声を上げた次の瞬間、今度はなのはの手によってユーノ(変態)が宙に舞った。

「うううわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!っぐぺ!!!」

今度は受け止めず、ユーノは地面に落下し、無残な姿になってしまった。

「はぁ、はぁ…裸って、どういう、ことなの、ユーノくん…!?」

怒りのあまり、言葉がズムーズにでてこないようだ。見ているだけの俺にも重圧(プレッシャー)が襲ってくる。

「そ、それは防護服(バリアジャケット)を着るためにしょうがなく…決してわざとじゃないんだ!信じてっ!!」

「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ，ｍａｓｔｅｒ？」

ユーノの必死さにそろそろ同情の念が生まれそうだったころに、今まで沈黙を守ってきたレイジングハートが急に声を発した。

「…何かな、レイジングハート」

「Ｙｏｕ　ｃａｎ　ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　ｗａｙ　ｈｏｗ　ｔｏ　ｓｅｔ　ｕｐ　Ｂａｒｒｉｅｒ？　ｊａｃｋｅｔ．Ｉｆ　ｙｏｕ　ｅｓｔａｂｌｉｓｈ　ｎｅｗ　ｗａｙ，ｙｏｕｒ　ｃｌｏｔｈｅｓ　ｄｏｎ’ｔ　ｇｏ　ａｗａｙ，ａｎｄ　ｙｏｕ　ｄｏｎ’ｔ　ｂｅ　ｓｅｅｎ　ｙｏｕｒ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｓｋｉｎ」

「ありがとうレイジングハート、ぜひそうしてもらえるかな」

どうやらいちいち裸になる問題は解決したらしい。新しい主の要望に対して、自分なりの解決案(サービス)をすぐさま提供したレイジングハートの有能さには脱帽するばかりだ。

「…あと、ゆうきくん」

「どうした、なのは？」

未だに真っ赤な顔をしているなのはがこちらを向いた。

「…ゆうきくんも、見たんだよね？」

…あ。
「もー！ゆうきくんのえっちっ！！」

「じゃあなのは、ユーノは任せるよ？」
「うん。大丈夫。お父さん達もいいって言ってたから」
あの後、俺はなのはを送るために二年ぶりとなる高町家への訪問を果たしていた。と、いっても、なのははこっそりと抜けだしてきたらしいので、家の中までお邪魔するようなことはない。
ユーノのことだが、相談の結果、もしもの時の言い訳のためにも一時的になのはのうちで預かってもらうことになった。
それに、現状魔法を使えるのがなのはだけ、ということもあって、なのはが優先的に説明を受けるべきだろうという結論になったのだ。まぁ、もしなのはのうちで、何か問題が発生するようなら、もちろん預かり先はうちに変更することとなったが。
「おかえり」
「お、お兄ちゃん」
なのはが慌てたような声をあげる。
懐かしの恭也さんの登場だ。夜遅くに外出したなのはを心配して玄関を見張っていたのだろうか。あいかわらずのシスコン（変態）っぷりに涙がでる。
「こんな時間に…き、貴様は高瀬　結城！？何をしにきた！！」
「…お久しぶりですね恭也さん。フェレットを探す手伝いをなのはにしてもらったので、送りにきただけですよ」
俺に対しても昔通りの反応だ。どうも、なのはが昔は結構俺についていたので、そのことでライバル意識（醜い嫉妬）を抱いているらしい。あまりに大人気ない態度に、昔はよくため息をついたものだった。
「ふん！！なのはのくっつき虫を未だにやめていなかったとはな…いいだろう、なのはにちょっかいを出すということが、どういうこ

とか教えてやる！！」
訂正、今でも呆れが止まらない。この人はどこまで逝（変態になる）ってしまうのだろうか。
「こーら。やめなさいって、大人気ない。久しぶりねー結城君、元気にしてた？」
「お、お姉ちゃん」
こちらも久方ぶりの再会となる美由希さんだ。美由希さんは恭也さんと違って、話が分かる人のはずだ。
「お久しぶりです、美由希さん。すみません、俺の事情でこんな遅くまでなのはを連れまわしてしまって」
「いいのよー無事に帰してくれたし、それに男の子と一緒なら安心だしね」
やはり美由希さんは話がわかる人だったようだ。とりあえずなのはのために、俺が悪いということにしておく。
おそらく、恭也さんの印象はさらに悪くなると思うが、俺の印象はたぶん現状でも最低なのであまり意味はないだろう。
「美由希！しかしだな…」
「お兄ちゃん！遅くに内緒でお出かけしてごめんなさい…。だから、ゆうきくんは許してあげて」
…少し思惑がずれた。
俺としてはこのまま恭也さんの怒りの矛先を俺にむけ、なのはは無罪無傷で済ますつもりだったのだが、俺を心配して、なのはの方が折れてしまった。
「む…。仕方がない。なのはに免じて許してやる、感謝しろ」
ま、まったくこの人は…。
まぁいい、今日はとりあえず帰ることにしよう。今回の件に関しては、唯一封印を使えるなのはに全ての決定権がある。俺はなのはの決断を見守るだけだ。
「じゃあ今日は帰ります。ではまた、美由希さん。またな、なのは」
「うん！またね、ゆうきくん！！」

朝の強烈な光が俺の瞼を抜けて、網膜にひりつくような痛みを感じるとともに俺はゆっくりと起き上った。
「ぐわー、眠いな…」
昨日あんなことがあったせいか、寝つきがよくなく、今日は寝不足だ。しかも、なのはがどうすることにしたのかの連絡もまだ受けていない。
「…なんにせよ、今日も朝食作りますか…」

さよならー、の号令とともに俺は教室をでた。
今日も今日とて放課後なわけだが、朝なのはから連絡がなかったので正直どうしようもない。
本当にどうしようか。俺が携帯を持ってないので、連絡をとるのが非常に難しい。こういう非常事態のときになって必要なものがないなんてことはよくあるが、いちいち家で連絡を待たないといけないというのは本当に面倒だ。
直帰しよう。
と、思ったが、そういえば昨日買う予定だった本を買っていないことに俺は気づいた。
せっかく気づくことができたので、今日は本を買いに行くことにしよう。ついでに翠屋のほうを覗いてみて、運がよければなのは達に会えるかもしれない。
それにしてもいい天気だ。朝は寝不足のためか、陽の強さを強烈に感じたが、昼下がりのこの時間帯になってくると、むしろ昼寝に最適なぽかぽか陽気といった状態だ。これだけの昼寝日和のなか、寝不足の顔をさらすのは、もしかしてとても損をしているのではな

いだろうか。
本を買って、翠屋になのはがいなかったら、電話を待ちながら昼寝をしよう。
そう思ったときだった。

リィィィィィィィン！！

昨日の感覚に近いものがまた訪れた。
「いや、違う…これはユーノが呼んでるんじゃない、ジュエルシードだ！」
昨日の化け物（ジュエルシード）と同じ感覚だ。昨日体感したおかげなのか、どこにいるのかもばっちりわかる。
「こっちだな…すぐに行ってやる！」

ジュエルシードの気配を感じるままに走り出した俺は、とある神社の前についた。
遥か上まで伸びる階段のその先にジュエルシードの気配がする。
しかしその気配に俺は違和感を感じていた。昨日のように瀑布のような圧倒的なプレッシャーではない、どこか心臓が脈動するような徐々に強まる気配。
「もしかして、まだ昨日みたく化け物（発動）に変化してないのか？」
だとしたらラッキーだ。俺はなのはのように封印することはできないし、発動してたら正直手伝えることはない。
しかし発動前なら見張るなりなんなりできることはある。それに発動前なら被害が可能性も低くなるだろう。
俺はジュエルシードが発動していないことを祈りながら、急いで階段をのぼった。

「はぁ、はぁ…なんつー長い階段だ…」
異常に長い階段をようやくのぼりきった。
その苦労の甲斐あってか、ジュエルシードは明滅を繰り返しているものの、まだ発動していないようだ。
「よかった…」
ほっと息を吐き出した。だが、ジュエルシードは今にも発動してしまいそうだし、神社には犬と遊んでいる一般の方がいる。このまま発動することがあれば、巻き込んでしまうかもしれない。
できたら帰ってくれないかなー、と思っていると、犬を抱えてこっちのほうにやってくる。
すれ違いざまにお互い会釈をする。
まさか本当に帰ってくれるとは…。どうやら運の向きがいいらしい。俺としては、おそらく俺と同じようにジュエルシードの気配を感じているだろうなのは達が来るのを待つだけしかすることがない。
しかし、本当になのは達も気が付いていて、こっちに向かってきてくれているかは疑問が残るところでもある。
まったく、昨日から携帯が必要に感じることが多い。今、なのはに連絡をとることができたら、どれほど気が楽になるだろうか。
「…とりあえず、今はジュエルシードを見守りますか」

「はぁ、はぁ…やっと着いたよ～」
しばらく待っているとなのはとユーノがやってきた。
「遅かったな、なのは、ユーノ。今にも発動しそうで緊張したよ」
「ありがとうユーキ。ジュエルシードは発動してないみたいだね。…なのは」
ジュエルシードは最初よりも輝きをましてはいるものの、発動は

していない。封印するなら今のうちだろう。
「うん、分かってる。…で、どうしたら昨日みたいにできるんだっけ？」
おいっ！
なのはの発言に思わずがくっ、とくる。何のためにユーノをなのはに預かってもらったと思っているんだろうか。
「…昨日の、我、使命を…から始まる発動パスワードを唱えて」
「えぇ！？そんなに長いの覚えてないよ？」
一体、昨日、何を話し合ったんだろうか。
俺としてはしっかり魔法について基本的な話はできただろうと思っていたが。
「…ＯＫ，ｍａｓｔｅｒ．Ｓｔａｒｔｉｎｇ Ｓｅｑｕｅｎｃｅ Ｏｍｉｓｓｉｏｎ．Ｓｔａｎｄｂｙ ｒｅａｄｙ…ｓｅｔｕｐ」
起動パスを省略してレイジングハートが起動する。
一瞬の光のあと、なのはの手には昨日の杖が握られ、聖洋大付属の制服は防護服（バリアジャケット）へと変わっていた。
うん。ちゃんと裸になっていない。やはり、レイジングハートは相当に優秀だ。
「すごい…発動パスワードもなしにレイジングハートを起動させるなんて…」
ユーノはユーノでこのことに驚いているようだ。しかし、発動パスなしに起動するのは、レイジングハートのほうがすごいというわけではないのだろうか。
「ユーノ、発動パスなしに起動するのは、なのはがすごいのか？」
「そう。よっぽどレイジングハートとの相性…つまりデバイスとの適正値が高い証拠だよ。少なからず、僕には同じことはできない」
どうやらなのはのほうがすごいらしい。
「デバイスとの適正値ってのは、結構重要なのか？」
「うん。基本的に僕らの魔法はデバイスを介して発動する。だから

デバイスとの相性がいいというのは、それだけで優位なことなんだ。デバイスのほうが意志を酌んで魔法を発動させてくれたりとかね…そもそも、ユーキ、君にも魔法の力があるのに、なんでなのはの方に封印をお願いしたかって、レイジングハートとの相性が理由なんだよ」

俺達が話している間に、なのはは順調に封印を進めているようだ。

「封印は膨大な魔力を必要とするし、複雑な魔法だからデバイスなしには発動できないんだ」

「なるほど。じゃあ俺も魔法を使うことはできるのか…」

どうやら無事封印を終えたらしいなのはがこっちに歩いてくる。だが、どうも不機嫌な様子だ、どうしたのだろうか。

「おつかれ、なのは」

「ゆうきくんもユーノくんも、二人でお話しばっかりしてずるいの！」

俺達が封印そっちのけで話してたことが原因だったようだ。申し訳ない。

「ごめんな、ちょっと気になったことがあってユーノに説明してもらってたんだ。…そういえば、なのははどうすることにしたんだ」

「どうするって、なんのことなの？」

「ジュエルシードのこと」

直接会うことができたので、ここで聞いてしまうことにした。

多分、なのはは手伝うことにしたんだろう。もしそうなら、迷惑でないなら、俺もなのはのことを手伝いたい。正直、まだまだユーノが困ってるから、という理由でなんの力もない俺が手伝うほど人間できてないし、ユーノに入れ込んでもない。

だけど、あの時、一人で、公園で泣いていたなのはを助けられないなら男じゃない。

力がない俺はきっと手助けどころか、足手まといになるかもしれない。でも、もう一度あの時のようになのはのそばにいることはできる。

「私は…ユーノくんを手伝うよ。ジュエルシードを、全部集める」
「そっか」
やっぱりなのははずっと変わらず、優しい女の子のままだった。
「なのは。その、よかったら、俺も手伝っていいか？」
なのはは一瞬きょとんとした顔をした。その顔が徐々にほころんで、最後には満面の笑みとなった。
「うんっ！ありがとう、ゆうきくん！！」

魔法の呪文がリリカルとか（後書き）

お目汚しでしたがこれからも読んでいただけると幸いですm（＿）m

街はユーノに危険だな（前書き）

久しぶりの投稿で非常に肩身が狭いですがここで一つ。
先日、バイト先でホットワインを注文なさったお客様がおられました。
その時、僕はこう思ったんです。

ホットワインってなんてエロいんだろうと。

冷たい雨が身体を刺す中、気づけば俺は何よりも冷たい涙を流すあいつのことを抱きしめていた。
「今日は、俺んとこ、来いよ」

身体の芯まで冷えてしまってるだろうあいつのためにせめてホットワインをいれて手渡してやる。きっと、今のこいつにはあたたかさとつらいことを忘れるためにこれが必要だから。
「熱いからゆっくりな…。俺がいてやるから」
そういうとあいつはすっと一筋頬を流れた雫を隠すようにマグカップをあおった。そうして俺に再び顔を向けた時には、いつもよりちょっとほっぺが紅いだけの、いつも通りのあいつになっていた。

「ねぇ、つらいこと全部忘れさせて…」
そういって重ねたあいつの掌は燃えるようにあつかった。

みたいな？
…そんなことないですよね。では本編、暇つぶしにどうぞ。

街はユーノに危険だな

輪郭のはっきりした夜だ。

輝く月が叢雲と漆黒の空の境をくっきりと浮かび上がらせている。小さな雲の多い日だな、という印象とは裏腹にぽつりと浮かんだ月が雲で陰るようなことは不思議とない、そんな夜だ。

そして月夜の中ぼんやりと月光を受け、冷たく立ち尽くす校舎ー俺が普段通っている公立海鳴小学校の校舎ーに向かうように俺達は立っていた。

朝、たくさんの同級生や上級生、あるいは下級生たちにあふれ、声の絶えないこの校舎も、夜になってしまえば怪談スポット（不気味な場所）にしかならない。

「もうすぐ来るな」

「うん」

ぶるりと感じる寒気をごまかすように、俺の隣に立つ少女ーなのはに話しかけた。その表情は真剣そのもので、俺が感じる怖気（邪念）などみじんも混じっていないようであり、まぁ俺たちが今直面している状況を顧みれば当たり前のこととともいえるだろう。

そう、俺達は今ジュエルシード集めの真っ最中なのだ。

ユーノと出会ったあの日から、俺達三人は毎日ジュエルシード集めに奔走しているが、今日は偶然にも我が校に出没し、封印する運びとなった。

しかし、封印という大仕事があるなのはとは違って、今のところまったく魔法というものが使えない俺は、ジュエルシードが見つかった時点で実は役立たずなのだ。

ではジュエルシードを見つけた後俺は一体何をしているのか。答えは簡単、なのはが封印をするのをただ……みているだけだ。

だから暇を持て余した俺が偶々今回人体模型にとりついたジュエルシードから怪談を想像してしまうのもしょうがないこと、にならー

ないだろうか。
「Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ」
俺達を追って校舎からジュエルシード（人体模型）が現れたと思った瞬間にレイジングハートが光を放つ。相変わらず反応がいい。
「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル？？、封印！」
なのはの呪文とともにジュエルシードに向かって光が伸びる。その光に包まれたと思った時には、すでに封印は終了していた。
「ふぅ…これで五個目だね、ゆうきくん」
あっさりと封印を終えたなのはがそう言った。
月はまだ天上で孤高の輝きを失わずにいた。

無事に封印を終えた俺たちは街灯の下、帰路についていた。
起動状態にしっぱなしのレイジングハートをずるずるとなのはが引きずりながら歩いているため、からからと音が反響し続けている。
「なのは、大丈夫か？」
「う、ん。ちょっと疲れちゃったかも…」
結構しんどそうだ。
ユーノの話を聞いたところ、封印の魔法には相当な魔力が必要らしい。魔力、というのはどうもゲームとかでよくある精神力―すなわちＭＰ―とは違って、どちらかというと体力に近いもののようだ。現代科学では感知できない器官、リンカーコアが生み出す生命力のようなものだと俺は考えている。
つまり、先ほどジュエルシードを封印したなのはは相当体力を削られている状態というわけだ。それに加えて、連日のジュエルシード探しに封印、塾と最近のなのはは休む暇もなかったのだろう。
封印では役に立たない俺だが、せめて少しでもなのはの負担を減らしたい。

「なのは、今日は俺が家までおんぶするよ」

そう俺が言うと一転、なのはは顔を真っ赤にして飛び上がった。

「ふぇっ！？何言ってるのゆうきくん！？」

「いや、なのはも疲れてるみたいだし、俺は体力に余裕あるからおんぶするよ」

あうあうと、なのはは言葉がでないようだ。流石におんぶさせるのは悪いと感じているのだろうが、遠慮されると俺の罪悪感がつのるばかりだ。少し強引にでもなのはには休んでほしい。

「なのは、ユーキの言葉に甘えときなよ」

ユーノも援護射撃をくれた。やはりユーノも俺と同じように感じているのだろう。ユーノはジュエルシードが各地に散らばってしまったことにひどく責任を感じている。なのに回収をなのはにまかせっきりにしていることに負い目を感じているのだと思う。

「ほら、ユーノの言うとおり。おいで」

もう一度、ほら、と手招きするとようやく真っ赤に染まったままの顔をうつむかせてやってきた。

「じ、じゃあお言葉に甘えて…」

もごもごと言葉にならない声でそういうとなのはは俺の首に手を回した。

よっとなのはを背負うと、予想以上の軽さに驚くと同時に、流石にこう密着していることに恥ずかしさを感じる。自分の頬が熱を持ち始めたのがわかる。

「なのはって、軽いんだな…」

「ふぇぇ！？」

その恥ずかしさからか、普段なら絶対もらさないような失言をしてしまう。失敗の羞恥から顔面の温度上昇が加速する、俺もなのはももう顔はゆでだこのようだ。

「…」

「…」

何も言えない雰囲気が俺達の間に満ちている。ユーノは俺の横を歩きながらも沈黙を守っているし、もちろん俺もなのはもお互いなんといったらよいのか考えがまとまらない。

こうなってはもう、思考が整理されるまで黙々と歩かざるをえない。

静かだ。

首に回されるなのはの腕、背中に感じる確かなぬくもりにどきどきと鼓動が高鳴る。自分から申し出ておいてこんな風に短絡な感情を持ってしまうことに自己嫌悪が止まらないが、このなのはとの距離感が少し昔のように感じられて、俺はつい先日交流が再開した幼馴染(なのは)について思いを馳せた。

ずっと昔に出会ってから、小学校に入学するまでの間俺はほとんどの時間をなのはと一緒に過ごしていた。

あの頃の俺達は我ながら相当に大変(不幸)だったと思う。

俺と兄さんは両親を亡くし、なのははなのはで父親…士郎さんが仕事の怪我で入院、そのことであまり家族と一緒に居るということができなかったそうだ。

だからその寂しさを埋めるように俺達は一緒に遊んだ、一緒に居続けた。まぁ士郎さんの容体が回復し、なのはと学校が変わってからは疎遠になってしまっていたが。それにしても、学校が違うから、という理由であれだけ一緒に居たなのはと一気に疎遠になるのは我ながら変わってると思わなくもない。

新しい環境に慣れようと、代わりのものを見つけようと俺もなのはも必死だったのかもしれない。

忙殺。

忙しさも時には心の隙間を埋めてくれるということだろうか。

「…ねぇゆうきくん。ゆうきくんは今、学校楽しい？」

もしかしたらなのはも同じようなことを考えていたのかもしれない。

「今日行った学校、ゆうきくんが通ってるんだよね。ちょっと気に

なって」
「ん、まあ友達もそこそこいるし、楽しいよ。なのはもこないだ会ったバニングスさんと月村さんとかなり仲よさそうだったね」
俺がそう言うと、うんとなのはがうなづいた。顔は見えないが、なぜかなのはがにっこりと笑っているような気がした。
「アリサちゃんとすずかちゃんは大切な友達。初めて会ったときは、ちょっとけんかしちゃったんだけどね」
懐かしそうな気配から一転にゃはは、と苦笑するなのは。どうにも面白そうな気がするので、俺は少し突っ込んでみることにした。
「喧嘩って、一体なにがあったのか気になるな」
俺がそう聞くと、少しなのはは考えてからゆっくりと話し始めた。
「…うん。あれは小学校に入ってすぐのころだったかな…。あのころのアリサちゃんってちょっとやんちゃしてて、すずかちゃんのことを、んと、いじめてたの」
「へぇ」
それは俺のアリサに対する印象からしてみれば想像(真反対な)もできないことだった。気が強い、強すぎるくらいの正義感を持っている子、だと思っていたが、昔はそうではなかったのだろうか。
仮に、昔とは性格が変わった—もちろんいい方向に(プラス)—として、おそらくその原因はなのはにあるのだろう。まぁ推測にすぎないが。
「それで思わず…」
「うん、思わず？」
続きを話すことを逡巡するなのはを促す。
「思わず…アリサちゃんの顔を殴っちゃったの…グーで」
「それはひどい」
きっとなのはがグーで殴ったのは俺の影響なんだろうな…。昔は仲がいいといってもそこそこなのはと喧嘩したこともあったから、その経験を生かしてしまったのだろう。

喧嘩のときとっさにグーパンをだす少女(なのは)…少なからず、おしとやかな大和撫子という感じではないな。
正直笑いたい話だったが、原因の一端が俺にあるとなるとあまり笑えない。
「結局そのあとアリサちゃんとは取っ組み合いの大げんかになっちゃったんだけど…」
「うん。だけど？」

「結局…一方的にアリサちゃんをぼこぼこにしちゃったの」
「それはどうかと」

なのははにゃはは、と笑っているが、笑っている場合じゃないと思う。同年代の子を喧嘩でふるぼっこにできるとか最早おしとやかとか言ってるレベルじゃない。しかもアリサは絶対運動神経がいいタイプなのに一方的とか。
せっかくの可愛らしさを損ないまくりだ。
「でもアリサちゃんも諦めが悪くて、収拾がつかなくなったときにすずかちゃんがおっきな声でやめてっ！って叫んだの」
「ほお」
「それで私もアリサちゃんもびっくりして、けんかを止めて…それで仲直りして、今では大切な友達」
それで友達になれたってことは、アリサはそのあとしっかり謝って、そしてすずかとなのははそれを受け入れたのだろう。
アリサとすずか。出会い方はちょっと意外なものだったが、本当になのははいい出会いをしたんだなと俺は思う。
最終的に自分の非を認めることのできる、潔いプライドをもったアリサ。
最終的に自分をいじめていた相手を許せる、広い度量をもったすずか。
俺がなのはの傍から離れてしまっても、なのははしっかりと自分

を支えてくれる友人たちと過ごしていたんだと思うと、本当に二人には感謝してもし尽くせない。
　気が付けば俺は意識せずなのはの名前を呼んでいた。
「なのは」
「何？ゆうきくん」
背中の気配から俺が話すのを待っていることを感じる。
「二人と友達になれて本当によかったな」
「うんっ！」
　間髪入れずにそう答えたなのははきっと、見とれるような笑みを浮かべていたのだろう。

「ユーキ、ちょっといい？」
　なのはを家に送ると、別れ際にユーノが話しかけてきた。
「どした、なんかある？」
　正直一体何の用かわからなかったので、深く考えずに聞いてみることにした。
「うん。ちょっとお願いなんだけど…二人でいい雰囲気になるのは全然かまわないんだ。ただ、どうか、僕という存在がいたことくらいは、三人でいたことくらいは、どうか覚えていて下さい…」
　あっ。

　そんなことがあった翌日。俺は朝からなのはの電話にたたき起こされ（正確にはなのはの電話にではなく、バイトのため早起きしており、なのはからの電話を受け取った兄さんに文字通りたたき起こされたのだが）…なぜかサッカーの観戦をしていた。
「ほらっ！しっかり走りなさいよー！！」

ご覧のとおり、はりきって応援するアリサ、その横でにこにこと試合を見つめるすずか、そしてなのはと聖洋大付属三人娘が勢ぞろいである。こちらの三人は今日突然こんな状況に陥った俺とは違って、前々から今日の試合を楽しみにしていたらしい。

まぁクラブに所属するほどではないが、休憩時間中に友達とするくらいにはサッカーが好きなので今日のこの降ってわいたイベントを楽しむことができないこともないだろう。

さっきよりは前向きな気分になれた俺は、俺の横にいる人物一久々の対面となる、士郎さん、に話しかけた。

「士郎さん、いつの間にかサッカーチームなんて作ってたんですね…正直びっくりしました」

なのはの父親である士郎さんは、なのはの家族の中で最も俺との接点が薄い人だ。

というのも、俺となのはが小学校に上がる直前まで士郎さんは入院しており、俺がわざわざ病院に行って士郎さんに会うという機会が、まぁ当然とは思うが、なかなか無かったのだ。

そのため実は士郎さんに関して俺が知っていることは少ない。正直、サッカーチームのオーナー兼コーチをしてたなんて今日が初耳だ。

「まあね。なのはが小学校に入って、翠屋も安定してきたから子供たちに運動の機会をあげたくてね…自分が運動するのも見るのも好き、というのも大きな理由だけどね」

そういって笑いながら試合を見つめる精悍な横顔は、本当に恭也さんそっくりだ。昔から若々しいとは思っていたが、大学生の恭也さんとほとんど変わらんとは化け物じみている。

なのはの母親の桃子さんも同様な評価だ…つまり、高町家全体が世界のうらやむ永遠の若さの象徴なのかもしれない。

…どうにも暇でくだらないことを考えていたら、いつの間にか士郎さんがオーナーをしてるチームが危なげなく勝ったようだ。なのは達は飛び上がって喜んでいるが、俺としては興奮したアリサが握

りしめて振り回している茶色の物体の正体が気になるところだ。
…なるほど、見なかったことにしよう。

太陽は真上に燦々と輝いているが、暑いということはない。
さらさらとした風が流れるおかげで今日は最高の春日和。今年の春、再びこんな日が訪れることがあるのかどうか怪しいほどにいい天気だ。
翠屋はサッカーチームの子たちでいっぱいだ。試合に快勝して気分も上々、今日の天候にふさわしく、まさに最高の気分だろうことが容易に見て取れる。
一つ扉を経た先にはそんなにも楽しげな光景があるというのに、俺達は変な緊張感のもとケーキをつついていた。
いや、俺達という言い方では語弊が生まれるだろう。そう、正確に状況を伝えようと思うのなら、俺達ではなく事情(魔法サイド)を知ってる組が冷や汗をかいている、というのが一番ふさわしいだろう。
中でも一番の苦境に立たされているのは擬態(ユーノ)フェレットだ。俺達四人が囲むテーブルの中心に立つその姿は、まるで裁判を受ける被告人のようで同情を誘う。
なのははなのはでこれから起きることを予想して硬くなってるし、俺は言うまでもないだろう。
「それにしても、改めて見るとなんかこの子フェレットとはちょっと違わない？」
アリサのなかなか鋭い発言になのはがびくっとなる。俺はそれが怪しまれる原因になるのでは、と思ったがアリサもすずかもユーノに夢中でなのはには注意を払っていなかったようで俺の一瞬の懸念は杞憂に終わった。
「そういえばそうかな…動物病院の院長先生も変わった子だねって言ってたし…」

追加攻撃のすずかの疑問。最早俺となのはの精神防壁は瓦解寸前だ。
「と、ということはつまりあれだ、やっぱりおこじょなんじゃないか！？」
なんとか注意をそらそうとアリサに対する禁止ワード（地雷）をぶち込む。
とりあえずは予想通り、アリサがかみついてきた。
「ユーキ、あんたまだそんなこと言ってるの！？あれからちょっと気になっておこじょのこと調べたら、全然色が違うじゃない！まぎらわしいこと言わないでよ！」
このまま作戦通り話題をそらす！
「あ、あ～そうなのか。すまん、すまん。まぁきっと珍しい種類のフェレットなんだろ。ところでアリサはユーノのことをずいぶん気に入ってるみたいだけど動物好きなのか？」
「ふんっ、まぁ犬は大好きで何匹も飼ってるわよ。だから動物は好きなほうね」
若干かみついてきたテンションのままだが、どうやらこのあからさまな話題転換にのってくれたようだ。少し安心しながらすずかにも聞いてみる。
「月村さんはどう？」
「私も好きで、猫を飼ってるよ。…それより、ゆうきくんってまだ私たちのこと名字で呼んでるんだね」
少し苦笑気味に返された。どうやらアリサも同意見のようで俺の方をじと～とした目でにらんでいる。
まぁなのはのことも名前で呼ぶように戻したし、二人が同年代の男から名前で呼ばれるのを気にしないならこちらも遠慮することはないだろう。
「分かった。アリサ、すずか、これでいい？」
「許してあげないこともないわ」
「全然かまわないよ」
ちょっとだけ距離の縮まった俺達をなのはがにこにこと見つめて

いる。
ほんとに、こんな日が続いたら最高だな。

「「「ありがとうございましたー！！！」
どうやら翠屋でご飯を食べていたサッカーチームの面々もここで解散のようだ。士郎さんに見守られて散り散りに帰路につく。
ということは俺達もそろそろ解散だろう。今日の午後はアリサもすずかも家族でお出かけをするそうなので、二人とも帰宅するのだ。
アリサにもみくちゃにされているユーノを横目に、さて俺はどうしようかと考える。
おそらくなのはも今日は帰宅だろう。昨晩のジュエルシード集めではとても疲れている印象を受けたから、流石に今日は休むだろう。これでもし今日もジュエルシードを集めるなんてことになったら、俺としてはなのはが疲れのあまりおかしくなってないか心配しなくてはならない。
まぁなのはに合わせようか、と考えているとふと今日の試合で大活躍していたキーパーの男の子、といっても多分俺より年上、が気になって自然と見つめるかたちになっていた。
キーパーの先輩がかばんのポケットからなにかを取り出してじっと見ている。
って、あれジュエルシード！？
すぐにしまってしまったためよく分からなかったが、あれはジュエルシードではないだろうか。
ちらっとなのはをうかがうが、どうも気づいてない様子だ。
「あ～面白かった。…はい、なのは」
そういって目を回したユーノを渡すアリサ。アリサは本当に動物が好きなのだろうか？ユーノに対する悲惨な扱いを見てると疑わしくなってくる。

「さて、じゃあ私たちも解散」
「うん。そうだね」
予定通り、ここで解散だ。
「二人とも楽しんできてね！…ゆうきくんはどうするの？」
「なのはこそどうすんだ」
確信はないが、あれがジュエルシードである可能性がある以上、ほっておくことはできんだろう。俺としてはいつも通り三人で追いかけて確かめたいところだが、確信もないのにお疲れのなのはを連れまわすのは気が引ける。
「う～ん、おうちに帰ってのんびりしようと思ってるよ」
やはり休むようだ。連日魔法を行使してるのが堪えているのだろう。ここは…まぁ確認のためだし、ユーノと二人で、最低俺一人でも大丈夫だろう。
「じゃあちょっとユーノのこと借りてもいいか？たまにはユーノと遊んでみたいんだ。あとで家に届けるからさ」
「うん！全然いいよ」
はいっ、とユーノを渡してもらった。未だに目を回しているのかぐったりとしたままだ。…憐れユーノ。
じゃあ確認のためにスニーキング（尾行調査）と行きますか。
「それじゃなのはしっかり休めよ。アリサとすずかもまたな」

「ねぇユーキ、たまには僕と遊んでみたいって台詞はすごくうれしかったよ？でも、どうして僕らは男二人で他人のデートをのぞき見なんてしてるのかな？」
「…まさかリア充のデートをのぞくのにこんなに体力を使うとは思わなかったんだ…。それに、できるなら俺だってこんなことしたくないんだぜ？」
結局キーパーの先輩をユーノと二人で追いかけることにしたが、

どうやらマネージャーの女の子は先輩の彼女だったようで、試合後の、しかも自分のチームが勝った、ラブラブのデートを二人で見る羽目になってしまったのだ。
　出歯亀をして先輩に申し訳がないという気持ちももちろんある、がどちらかというと情けないというか、どこか虚しい気持ちで胸がいっぱいだ。
「じゃあなんでこんなことしてるのさ」
「…さっき先輩が石を見てたんだけど、それがジュエルシードな気がしてさ。一応確認しようかなと」
「っな！？じゃあなのはも呼ばないと、大変じゃないか！！」
「いやぁまぁ…確かに俺達二人じゃ役に立たないかもしれないけど、流石に昨日のなのはを見ると、不確定なことで振り回すのは気が引けてさ…」
　そういってやると、はっとしたようにユーノがうつむく。やっぱりこいつはこいつで、本当に責任を感じているんだろうな。魔法使(プロフェッシ)いたる(ヨナル)自分が、やむを得ず普通(アマチュア)の女の子に自分の仕事を押し付けてしまっている。そんな状況にこいつが心を痛めてないはずがないんだ。
「…ま、今日は二人でなんとかしようぜ。大丈夫、ユーノだって頼れる魔法使いなんだろ？」
「ユーキ…うん。頑張ろう」
　とまあなのはに頼りきりな情けない俺達(ダメ男な)が決意を新たにしている間にも前方の勝ち組はいちゃこらしているわけですが。
　ぱっと見、会話もないし腕組んだり手をつないだりしているわけでもない。が、キーパーの先輩の背中は自信(勝ち組の余裕)に満ち溢れその威風堂々たるオーラ―非リア充(リア充)のみ感じる―はばれないように距離をとったこの位置からですら威圧感を受けるほどだ。そんな先輩に寄り添う彼女も可憐な佇まいとその幸せそうな雰囲気がはっきりと周囲(俺達)にこう告げている―私たち、人生の勝ち組です―と。
「あれ？ユーキ、おかしいな、目から汗がとまらないや…」

「奇遇だなユーノ。視界がぼやけてうまく前がみえないよ…」
つらい。
この状況は俺達には酷すぎる。さっさと俺が見たものがジュエルシードだったのかどうか確かめて、一刻でも早く家に帰りたい…。

すっと、上着が落とされる。
薄桃色のキャミソールに隠された成長途中の肢体は、子供らしい健康さと、女らしい柔らかな印象が同居した危ういバランスの上でこそ生まれる魅力に満ちている。インナーからすらっと伸びる脚も数年たてば同性ですら直視できないほどの輝きを感じさせる。
「なのはは晩御飯までお休みなさーい…」

「なんか今へんな描写なかった!?」
「何いってんだ?ユーノ」
どうも先輩方のあまりのストロベリーっぷりにユーノは脳みそまで砂糖になってしまったらしい。
かくいう俺も、そろそろ精神力の限界が近い。このままではユーノと同じ轍を踏むことになるかもしれない。
「いや、何いってるのさユーキ!僕はおかしくなんかなってないよ!?」
「変人はみなそういu…まてユーノ、あれジュエルシードだ!!」
俺達が漫才をしている間にいい雰囲気になった先輩が、ダメ押しとばかりにプレゼントしようとしているあの石。やはり翠屋の前でそうだと思ったのは気のせいではなかった。
「まずいよユーキ…!早く手に入れて封印しないと!!」
焦るユーノ。しかし、この位置からどうやって手に入れればいい

のか…今にも暴走しそうなジュエルシードの怪しい輝きに否応なく鼓動が速まる。
落ち着け、冷静になれ。
少しだけ考える余裕を持った頭で模索する。やはり、これしかない。俺はわずかばかりの希望をもとにユーノを握りしめた。
「ちょ、ユーキ？」

すまん、ユーノ。

そう心のなかで謝罪するのと同時に俺は振りかぶった。
「一投入魂っ！！ユーノブレイカぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「ちょ、ま！ぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

強烈なドッププラー効果とともにユーノは一直線にジュエルシードのもとに飛んで行き、見事に先輩の手からジュエルシードを奪い取った。
「あっ！？この泥棒イタチ、返せ！」
先輩もさる者で、すぐさまユーノを追いかけたが、やけくそになったユーノが見事に逃げ切ったのは当然のことだろう。

…ジュエルシードはその後なのはにあらためて封印処理してもらったが、これ以降ユーノが俺と二人きりで出てがらなくなったのは語るまでもないだろう。

街はユーノに危険だな（後書き）

拙作ですが、多少の暇つぶしに読んでいただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6994x/

魔王と魔王式砲撃物語

2012年1月10日06時49分発行